

ロッテルダム日本人学校の現地理解教育の実践とオランダの教育

前ロッテルダム日本人学校 教諭

徳島県三好市池田中学校 教諭 久保喜昭

キーワード：日本人学校，ロッテルダム，オランダ，教育制度，現地理解，JSR

1. はじめに

ロッテルダム日本人学校での3年間は、私の人生にも、教員としての歩みにも、豊かな彩と深みを与えてくれた時間であった。今回、幸運にもいただいたこの機会に、私の目から見たオランダの様子や、ロッテルダム日本人学校（以下JSR）の情熱と信念に基づいた教育実践を、一部ではあるが紹介したい。

2. ロッテルダム日本人学校の現地理解の実践

(1) 心の通った本当の交流を目指して【老人ホーム・リユーマチセンター（高齢者療養施設）・支援学校訪問】

JSR小学部は、隔年で現地の老人ホーム、高齢者療養施設との交流活動を行っている。低中高学年がそれぞれ、歌、踊り、日本の遊びなどのプログラムを分担し、お年寄りに披露する。そして、ただ前で披露するだけではなく、お年寄りの輪の中に入り、一緒に歌い、踊り、折り紙をする。オランダ語の堪能な児童は数人いるが、大多数は片言の英語で接する。お年寄りの中にはオランダ語しか話せない人も多い。しかし、子供達の一生懸命さと笑顔に、お年寄りは心を開き、嬉しそうな顔で子供との時間を過ごしてくれる。いつも自分の部屋に閉じこもっている老人が、JSRの子供が来るからと会場に足を運び、今までに見せたことのない笑顔で交流の時間を過ごしていたと、施設職員の方が教えてくれた。小学部が全員で参加するこの交流で、子供達は、普段の語学学習の成果を試すことや、現地の施設を見るということだけではなく、心のこもった温かい触れ合い、そして、どうしたらお年寄りが喜んでくれるのか、そこで自分は何をすべきなのかという、考える力と実践力を身につけている。

また、5、6年生は、毎年、現地の支援学校とも交流をしている。その学校は、PTAバザーの収益金の一部を、寄付している間柄でもある。交流の前には、5、6年生の担任が、交流する支援学校の担任教師との打ち合わせに出かける。支援学校児童の様子や性格を聞いて、何をするか打ち合わせるためだ。支援学校の子供も教員も、この交流を大変楽しみにしてくれており、互いがアイデアをたくさん出し合うことで、交流の内容が固まっていく。昨年度は、例年なら一日だけのところ、数回におよぶ交流を行った。これはその時のJSR担当教員の熱意によるが、交流を積み重ねることでは、本当に心を通わせることができないという信念に基づいた実践であった。その熱意に応えるかのように、JSRの児童は準備段階から、実際の交流にいたるまで意欲的な活動をし、精神的に大きな成長を遂げた。



(折紙をする4年生 老人ホームにて)

このようにJSRでは、かつての派遣教員が今日まで築いてくれた交流活動を、新しく来た教員がただ受け継ぐだけでなく、さらに児童たちにとって有意義なものになるように、新しいアイデアや創意工夫を加え、毎年、発展、深化させている。

(2) 現地理解の実践を支えるもの①【オランダ人英語教師】

JSRにはオランダ人の英語教師が一人おり、JSR開校以来、ずっと英会話を担当してくれている。そのオランダ人教師は、日本に対して愛情を持ってくれており、日本人の性格や精神性をよく理解している。そして、長年の経験を通して、日本の児童の優れているところと足りないところを把握している。その人の口癖は「失敗を恐れないで。」「間違ってもいいよ」だ。初めは英語を話すこと、間違うことを恐れるJSRの児童達も、実は、英語を使っていろんな人たちと話したいと心の底では強く願っている。そのオランダ人教師は、その気持ちを見抜き、心の殻をやぶるような授業を創造し、ずっとそれを実践してくれている。児童達は親の仕事の関係で、3年ほどのサイクルでどんどん入れ替わる。小学校入学から卒業まで在籍する児童は稀有だ。しかし、児童は入れ替わっても、貫かれている精神はずっとあるので、在籍中に意識が変わり、積極性が身につくにつれ、どんどん英会話の力を伸ばしている。

そして、オランダの行事に関する内容や、季節の風物詩の体験学習も組み込み、英会話だけではなく、オランダに対する愛着や理解を深める授業をしてくれる。これがオランダ文化を尊重する気持ちにつながっている。オランダ人に対しても、親しみを持つようになっていく。このオランダ人英語教師の授業が、現地理解学習を積み重ねていく上で、精神的な土台になっている。



(オランダ夏の風物詩 ハーリング レッスン)

(3) 現地理解の実践を支えるもの②【派遣教員自身のオランダ社会への関わり】

オランダは成熟した民主主義の国であり、国内の治安がよく、安心して暮らせる国である。もちろん注意は必要だが、日本にいるような感覚で、日々の生活を送ることができる。だからこそ、派遣教員は様々な文化活動に参加するなど、オランダ社会にどんどん関わっていくことができる。そこで見たもの、素晴らしいと思ったものが、教室での話題になり、校外学習の行き先になる。つまり、派遣教員自身のオランダでの見聞、経験が、JSRでの教育実践に直接つながっている。

また、JSRにはオランダ語の堪能な事務職員が、様々な生活面のサポートをしてくれる。しかし、市役所での手続きや病院での診察など、できる範囲で自分自身が処理するので、オランダで生きていく術を自然と身につけていく。その様々な生活面で、オランダ人の精神性や価値観に触れることができ、これがオランダ社会への共感や理解に、根っこの部分でつながっていく。派遣教員自身が、オランダを愛し、オランダ社会に溶け込むことが、JSRの現地理解教育実践の原点になっているのだ。

3. オランダの教育事情

オランダは先進的な取り組みをしており、特筆すべきことはたくさんあるが、このレポートでは、資格試験制度とワークシェアを取り上げたいと思う。

(1) 卒業資格制度

オランダは卒業資格制度を取り入れている。(ほとんどのヨーロッパ諸国が導入) 卒業資格制度とは、高校卒業の資格試験のことで、これにパスをすれば、どの大学にも入学することができる。大学で勉強するだけの力があると認められれば、誰に対してもその門戸を開けているのだ。大学入試はない。そのため、本当に力がついているかどうか重要であり、小学校、中学校でも、当該学年の学力基準に満たない場合、留年は当たり前。保護者も生徒も、

留年を恥じる感覚があまりない。オランダ社会全体が、そのような意識なのだ。日本ではそれぞれの学校で卒業証書はもらうが、それは卒業をしたという証なだけで、能力を表すものではない。大学には、入試を受け合格しなければ進学はできない。卒業の時だけでなく、それぞれの学年で修得すべき力が備わっていても、上の学年に進級させるのが通例だ。

私は、日本の入試制度のすべてを、意味がないものとは思わないが、現行の制度は、日本の教育を形骸化させている大きな要因であると思っている。卒業資格制度は、導入の可否を検討する価値のあるものだと思う。私は、多くの生徒が進学塾に通って入試用の勉強をし、学校現場においては、ちゃんと学習課程を修得させられないまま、進級、卒業させている現状を見て、現行の入試制度を改める必要があると感じている。

(2) 教師のワークシェア

オランダでは社会全体にワークシェアが浸透している。正規、非正規に拘わらず、同一賃金、同一労働が法律で保障されており、この制度によって多くの人が雇用の機会に恵まれ、安定した生活とゆとりのある時間を手に入れている。平日の昼間に、働き盛りの男性が小さい子供を連れて散歩している姿や、運河を優雅にクルージングしている家族を見て、うらやましいと思ったことが何度もある。日本にはない「ゆとり」が、オランダにはある。そういう意味では、大変魅力がある制度だ。しかし、ワークシェアすることで、仕事の無責任さ、労働モラルの低さを感じるが多かった。日本人がオランダ人のように、ワークシェアを「わりきって」できるだろうかという疑問は、どうしてもわく。

オランダの教育現場も、最初は混乱があったようだが、ワークシェアが進んでいる。最初は混乱があったそうだが、制度として定着し、オランダの教師はゆとりをもって仕事している。日本の教師は、自分とはもかく、ほとんどの人達が、毎日多くの仕事をこなし、厳しい環境の中でも情熱を失わずに、子供達のために頑張っている。簡単にわりきって、その方が楽だからという理由だけで、このワークシェアを受け入れることはないであろう。日本で導入するためには、曖昧になっている教師の職務上の義務と権利を明確にすることや、人材の確保、給与の保障、社会の同意などが必要であると思う。

4. あとがき

オランダに派遣され、ロッテルダム日本人学校で働くことができ幸せだった。全校児童生徒数50名に満たない小さな学校であったが、そこは夢や希望をいっぱい抱いた子供たちと、子供のために全身全霊をかけて働く教職員達が日々集う、活気に満ち溢れた場所だった。私はあまりに微力で、何一つと言っていいほど、貢献はできなかったが、多くの方々に支えられ、3年間の派遣期間を無事に終えることができた。この経験は無駄にせぬよう、日本の教育活動に邁進していこうと思う。



(全校写真 校庭にて)